昭和25年3月14日　第三種郵便物承認　令和2年4月1日発行（毎月1回1日発行）通巻848号

禅の友

Zen no Tomo

4

April 2020

特集　降誕会

花咲き春たけなわのこの頃、仏殿前の梅花は相も変わらず脱落底を露しております。

一二三八年、道元禅師さまは、三十九歳のころ『正法眼蔵』一顆明珠をお示しになられました。道元禅師さまは、その中で祖師の言葉を引いて、この世は一つの明珠であると表現されました。

生まれては滅すが如きこの世のすべて、あなたと私、あちらとこちら、それぞれあるけれども、みな一切の命（明珠）そのものであるといわれるのです。そうなれば、どこを見ても明珠であり、見ている眼もまた明珠であります。

さて、四月は「報恩大授戒会」の月であります。

報恩大授戒会では、多くの皆さま方が一堂に会し、お釈迦さまの生き姿（戒）を学び、その戒に習うことをお誓いいたします。「戒」とは、例えば、命を大切にする・盗みをしない・性欲を制するなど十六条あります。学んでみますと、どれもあるべき大人の姿です。この十六条の戒をお誓いした者は、皆等しく仏弟子となります。

考えてみますと、私たちは、戒に習わなくとも、お誓いをしなくとも、生きていくのには何の問題もありません。むしろ面倒に思うかもしれません。しかし、世の中には争いや差別、ケンカやいじめ、環境破壊などの苦しみがあふれています。誰もが、悩み苦しみを抱えて生きております。

その様な中で、なんとか支え合い、一つ空の下、共に安らかにありたいと願うゆえに、一見不自由に思える戒は、向き合うものをわが身に引き当てる、すべての自己の安らぎを願う仏の姿そのものなのであります。

お釈迦さまの前で、自らが皆と等しい命（一顆明珠）をいただいていると観じ、我が身を顧みることは、よりよく生きる為に大切なことです。

仏殿前の梅花を仰ぎ、二度とないこの人生を大切に、そして皆と共に安らかに生きたいと願うものであります。

南無本師釈迦牟尼如来
南無本師釈迦牟尼如来

大本山永平寺 ☎〇七七六・六三・三一〇二

若葉の芽がふくらみ、春本番を迎えるころとなりました。

表題は中国宗代の詩人、蘇東坡（そとうば）居士が詠じた春の景色です。真面目とは真実の姿、ありのままということで、仏さまから見る風景です。

また真面目は「まじめ」とも読み、誠実に一生懸命打ち込むことです。

さて、總持寺では新しく五十余名の修行僧が上山し、いよいよ首座（しゅそ）和尚を中心に七月まで一〇〇日間の夏安居（げあんご）が始まります。

この春上山の修行僧にとりましては、修行道場という新しい環境に身を置き、自身の「真面目」を「まじめ」に探っていく夏安居となります。

さて、残念ながら、年初より猛威を振るっております新型肺炎コロナウィルスの感染拡大を受け、總持寺も対外的諸行持のほとんどを中止または延期せざるを得ません。

先月号にご案内しました、東日本大震災復興「祈りの夕べ」もやむを得ず中止となりました。

また、四月十日から十六日にかけての報恩大授戒会（ほうおんだいじゅかいえ）は行いますが、一般戒弟の募集を中止し、山内修行僧対象の内容へ変更いたします。入戒ご希望の方には大変ご迷惑をお掛けしますが、来年は是非ご参加くださいますようお願い申し上げます。なお、焼香師（しょうこうし）諷経（ふぎん）や団参法要、亡戒諷経（もうかいふぎん）は予定どおり行います。

国内外ともに大変な状況になりましたが、山内一丸となって乗り越えたいと存じます。

俳壇 曹洞

選・坊城俊樹

海峡を航く船を見て春を待つ

北海道　大野節子

評　句の意味は説明するまでもないだろう。待春の気持ちが伸び伸びと語られている。小手先の技巧によって作られた句より、よほど読者の胸に沁みるのでないか。同時に風景の大きさにも心打たれる。

古着屋の奥の怪しき裘

岐阜県　大下雅子

評　「裘」は「かわごろも」と読む。ちょっと古めかしい、皮のコートやジャンパーなどを指すことが多い。古着屋に置いてあるそれは、昔の不良が着ていたものだろうか。その怪しさと、年季が入った様子がありありと見えてきた。

◆傾けて又傾けてしじみ舟　大阪府　柏原才子

◆背を向けて濤やり過ごし磯菜摘　鳥取県　眞山博充

◆寒月と一糸纒はぬ秘湯かな　茨城県　鈴木米征

◆吉原へ向さし猪牙舟冬の梅　千葉県　長澤きよみ

◆手を合はせ一打に込める除夜の鐘　和歌山県　田﨑よし子

◆ほのぼのと村を染めゐし吊し柿　福島県　鈴木嘉志雄

◆流るるや平成令和去年今年　神奈川県　佐野勇

◆野仏の百体拝す冬日向　静岡県　望月かほる

◆成人式男もすなる化粧かな　愛知県　大竹妙子

◆尊徳の書を読みに来る寒鴉　三重県　西村廣視

選者吟

雪晴れの前に仏の牡丹雪

俊樹

作句小見　これは福井県の永平寺で作ったものである。その参道に到着したとたんに、美しい大粒の牡丹雪となった。しかし、そのすぐ後にはもう晴れ間が。すべてが仏さまのご加護かと思うと合点がいった。

曹洞俳壇・歌壇

選・長澤 ちづ

年末は蒸籠に蒸気が吹く頃に杵をかついで叔父が参じた

三重県　西村 廣親

評　餅つきを親戚一同総出で行っていたころの活気に満ちた年末の風景が浮かぶ。失われた風習への寂しさも窺える。二・三句目の時間の表現が五感を刺激し、その場の匂いや湯気の皮膚感、騒がしさまでも伝える。下句の措辞にも勢いがある。

初夢の色問わるれば眼裏に即顕ちてくる夏草の青

兵庫県　前田 あつ子

評　そういえば夢に色があるか否か話題にしたころがあった。総天然色映画が普及するまでのように思う。今は色付きの映像は当たり前だが……。それはともかく詩情溢れる一首である。

◆今朝は未だ旦白も訪はず鵯も来ず子の命日は静かなりけり
広島県　徳永 進一郎

◆リハビリに孫からもらったセーターのシマウマ柄が歩を軽くする
東京都　野村 信廣

◆絹糸の紅きを通す針孔に通る春先のひとすぢありて
東京都　長谷川 瞳

◆木守り柿風に晒され日に干されおおつごもりに一つが消えた
秋田県　小松 紀子

◆早朝の寒の海より刈りきたる間引き若布の茎の細かり
岩手県　阿部 凞子

◆もう寝たか病室出んと扉引く振り向けば兄細く目を開く
岐阜県　後藤　進

◆農具乗せそろり押し行く其の先を導くように鶺鴒振り向く
愛知県　深谷 ハネ子

◆青空に導かれゆく信州へ夢のあしあと見つけに来たよ
愛知県　長谷川 悦子

◆追ふ風と追はるる風は絡み合ひ落葉朽葉を連れて行きたり
鳥取県　眞山 博充

◆原発と水害重なるふる里に季を忘れずに花は咲き満つ
東京都　鈴木 正作

選者詠

災害の永く起らぬ危うさに駅名プレート、錆の縁取り

ちづ

作歌小見　温暖化の進む中、どの地にも起こりうる災害です。個人として何が出来るか一人一人が問われています。季節が来れば咲く花と詠う鈴木さんの一首に、まだ大きな自然の力があることに救われる気がします。大事に守ってゆきたい自然の力です。

【作品お待ちしています】ハガキ１通に３句（３首）以内を俳壇、歌壇別々にP23　掲載の送付先までお送りください。